

令和7年度病害虫発生予報第5号

令和7年8月1日
山梨県病害虫防除所

今月の天気予報

7月31日気象庁発表、1か月予報による関東甲信地方の向こう1か月（予報期間8月2日～9月1日）の天気は次のとおりです。

関東甲信地方では、暖かい空気に覆われ、気温のかなり高い状態が続いています。向こう1か月の気温も、暖かい空気に覆われやすいため、高い状態が続くでしょう。特に、期間のはじめは、気温がかなり高くなる見込みです。向こう1か月の降水量はほぼ平年並、日照時間はほぼ平年並の見込みです。

I 特に注意が必要な病害虫

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
果樹全般	カメムシ類	—	やや多い	<p>○7月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市、甲州市）へのチャバネアオカメムシの誘殺数はやや多い。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□山間部から果樹園へ飛来するので、夕方から夜間及び早朝に園を見回り発生状況を確認する。</p> <p>□飛来量は地域やほ場によって差があるので、発生状況に応じて地域ごとに一斉防除を行う。</p> <p>□令和7年度病害虫発生予察注意報第1号「果樹カメムシ類」を参考に防除対策を行う。※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること</p> <p>https://www.pref.yamanashi.jp/documents/107/r7tyuuihoulkamemushi.pdf</p>
ブドウ	晩腐病	平年並	平年並	<p>○7月下旬現在、早場産地では発病が確認され始めている。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□着色期以降の発病果粒は二次伝染源になるため、見つけ次第除去する。袋をかけてある園では発病した果粒が袋内で感染を拡大させるので、発病が見られる場合は改めて見直しの摘粒を行う。</p> <p>□ブドウ晩腐病防除マニュアル（令和7年3月発行）、令和5年度病害虫防除所情報第2号「ブドウ晩腐病に注意」を参考に防除対策を行う。※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること</p> <p>https://www.pref.yamanashi.jp/documents/104/boujosyojouhoubannpu.pdf</p>
	黒とう病	—	平年並	<p>○7月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□発病した新梢や葉、巻きひげは感染源となるため、見つけ次第取り除きほ場から持ち出して処分する。</p> <p>□柔らかい組織は本病に感染しやすいため、遅伸びした新梢や副梢は摘心するなど、新梢管理を徹底する。</p> <p>□ボルドー液等での定期的な予防散布を実施する。棚の周辺部など農薬のかけ残しがないように十分散布する。</p>

※果樹カメムシ類のトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/kajyukame.html>

【**稲**】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
<p><u>斑点米</u> <u>カメムシ類</u></p> <p>（クモリカメムシ） アカヒゲホソミドリ カスミカメ ホソハリカメムシ （アカシガカスミカメ）</p>	—	平年並	<p>○7月下旬現在、定点調査ほ場(中北、峡南、富士東部地域)における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□畦畔及び水田周辺の除草を出穂10日前までに徹底する。それ以降の除草は、水田内への斑点米カメムシ類の侵入を助長する恐れがあるので行わない。</p> <p>□水田内で水稻出穂前に結実するヒエの穂、イヌホタルイの小穂は斑点米カメムシ類の誘引源、発生源となるため、結実前に除草する。</p> <p>□発生状況に十分注意し、発生が認められた場合は薬剤散布を行う。穂揃期と乳熟初期(穂揃期7～10日後)の2回の薬剤散布を基本とするが、その後も発生が続く場合には追加散布を行う。粒剤の場合1回目の散布を出穂期～穂揃期に行う。</p> <p>□令和4年度病害虫防除情報第6号「水稻の斑点米カメムシ類の発生状況と防除対策について」を参考に防除対策を行う。 ※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること https://www.pref.yamanashi.jp/documents/104/220722boujyoshojyohou6gou.pdf</p>

II 各作物の病害虫発生予報

【**果樹**】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	<u>べと病</u>	—	平年並	<p>○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□気温が高くなると、発生は一時的に減少するが、降雨が続くと感染が拡大する恐れがある。</p> <p>□ボルドー液等での定期的な予防散布を実施する。併せて新梢管理（摘心など）を徹底し、副梢等に薬液が付着するように棚上散布も行う。</p> <p>□発病葉等は伝染源になるため、見つけ次第除去する。</p> <p>□収穫が終了した園では、収穫後の防除を早めに実施する。</p>
	<u>さび病</u>	平年並	平年並	<p>○7月下旬現在、巡回ほ場で発生は確認されていない。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□気温が高く、降水量が少ない日が続くと発生が多くなる恐れがあるのでボルドー液による防除を徹底し、収穫後も必ず防除を行う。</p> <p>□果実袋を使わずにカサかけで栽培した園では、葉裏へのボルドー液の付着が少ないため、収穫後の防除を徹底する。</p>
	<u>チャノキ</u> <u>イロ</u> <u>アザミウ</u> <u>マ</u>	—	平年並	<p>○7月下旬現在、黄色粘着トラップ（甲州市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□果粉の溶脱や果粒の汚染に注意し、薬剤防除を徹底する。カサのみの園では、定期的な薬剤防除を実施する。</p> <p>□新梢先端への寄生が多いので、新梢管理（摘心など）を実施し、薬剤が十分かかるよう棚上からもていねいに散布する。</p>

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	クワコナカイガラムシ	—	平年並	<p>○近年発生が増加している。特に雨除け栽培や収穫を遅らせた一部は場では発生が多く見られる。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□薬剤のかかりにくい隙間等に寄生する習性があるため、発生が見られる園ではかけむらが無いよう丁寧に散布する。</p>
モモ	せん孔細菌病	—	平年並	<p>○7月下旬現在、発病葉率は昨年より低く、果実被害は少ない。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□降雨が続くと感染が拡大する恐れがある。</p> <p>□発病葉及び果実は二次伝染源となるため、速やかに除去する。</p> <p>□モモせん孔細菌病防除マニュアル（令和6年3月発行）を参考に防除対策を徹底する。※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること</p>
	灰星病	—	平年並	<p>○7月下旬現在、現地における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□除袋後（着色始め）の防除を徹底する。収穫期に雨が多い場合や収穫期間が長引く場合は、追加散布を行う。</p> <p>□発病果は伝染源となるため、見つけ次第土中に埋めるなど適切に処分する。</p>
	モモンクイガ	—	平年並	<p>○7月下旬現在、フェロモントラップ（韮崎市、山梨市、笛吹市）への誘殺数は、平年並である。</p> <p>□8月上旬は第1世代成虫の発生盛期にあたるため、防除を徹底する。特に海外輸出を行う地域では発生状況に注意し、防除を実施する。</p> <p>□除袋後に雨が多い場合や収穫期間が長引く場合は、追加散布を行う。</p>
	モモノゴマダラメイガ	—	平年並	<p>○7月下旬現在、フェロモントラップ（韮崎市、山梨市、笛吹市）への誘殺数は一部地域で多いが、県下全域では平年並である。</p> <p>□8月上旬は第1世代成虫の発生時期にあたり、晩生種（極晩生種を含む）では果実への被害も多くなるため防除を徹底する。</p> <p>□除袋後に雨が多い場合や収穫期間が長引く場合は、追加散布を行う。</p>
	モモハモグリガ	—	平年並	<p>○7月下旬現在、フェロモントラップ（韮崎市、山梨市、笛吹市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□年間の発生回数が多く、密度の上昇も急激なため、発生状況に注意し、薬剤防除を行う。</p> <p>□収穫が終わった品種でも発生状況に注意し、防除を徹底する。</p>

※モモンクイガ、モモノゴマダラメイガ、モモハモグリガのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/92111468716.html>

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
モモ	リンゴコカクモンハマキ	—	平年並	<p>○7月下旬、フェロモントラップ（笛吹市）への成虫誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□除袋後に雨が多い場合や収穫期間が長引く場合は、追加散布を行う。</p>
スモモ	灰星病	—	平年並	<p>○7月下旬現在、現地における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□収穫前の降雨により多発することがあるので予防散布を徹底する。なお、収穫期に雨が多い場合や収穫期間が長引く場合は果粉の溶脱に注意して追加散布を行う。</p> <p>□発病果は伝染源となるため、見つけ次第土中に埋めるなど適切に処分する。</p>
	スモモヒメシンクイ	—	平年並	<p>○7月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□8月中下旬まで第2世代成虫の飛来があるので防除を徹底する。</p> <p>□収穫期に雨が多い場合や主格収穫期間が長引く場合は、果粉の溶脱に注意し追加散布を行う。</p> <p>□被害果は見つけ次第土中に埋めるなど適切に処分する。</p>

※リンゴコカクモンハマキのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/92111468716.html>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制トマト	黄化葉巻病	平年並	平年並	<p>○前作での発生量は平年並であった。</p> <p>○7月下旬現在、本病を媒介するタバココナジラミの黄色粘着トラップへの誘殺数は平年並である。</p> <p>□媒介虫であるコナジラミ類の防除を徹底する。（コナジラミ類の欄参照）</p> <p>□発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて、コナジラミ類を死滅させ、完全に枯らしてから施設外に持ち出し、適切に処理する。</p> <p>□令和4年度病害虫防除所情報第3号「施設トマトの黄化葉巻病対策について」（令和4年6月発行）を参考に防除対策を行う。※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること</p> <p>https://www.pref.yamanashi.jp/documents/104/220629bou_josyo_jyohou3gou.pdf</p>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠 (○) 及び防除上注意すべき事項 (□)
抑制トマト	コナジラミ類	平年並	平年並	<p>○7月下旬現在、トマト栽培ほ場（中央市）における黄色粘着トラップへの誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□侵入を防ぐため、施設開口部（天窗、側窓、換気扇口等）は0.4mm目以下の防虫ネットを展張する。また出入り口のカーテンは二重にするなどして侵入を防止するとともに、ネットの隙間や破れ等がないか注意して確認し、不備がある場合は直ちに補修する。</p> <p>□育苗期から防除を徹底し、定植時には粒剤を使用する。また、黄色粘着版を設置して発生状況を確認し、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> <p>□施設内外の雑草は増殖源となるため、除草を徹底する。また、芽かきした茎葉は適切に処分する。</p>
夏秋キュウリ	べと病	平年並	平年並	<p>○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□予防散布に努める。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。</p> <p>□多湿条件で多発するため、排水をよくして過湿を避ける。</p>
	うどんこ病	平年並	平年並	<p>○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□予防散布に努める。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。</p>
	炭疽病	並 (例年比)	並 (例年比)	<p>○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□発病後の防除は効果が劣るため、予防散布に努める。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。</p> <p>□窒素過多は発病を助長するため、適正な施肥量にとどめる。</p>
	ハダニ類	平年並	平年並	<p>○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> <p>□葉裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。</p>
	アザミヤカ類	平年並	平年並	<p>○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□ほ場周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠 (○) 及び防除上注意すべき事項 (□)
夏秋ナス	褐色腐敗病	平年並	平年並	○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □ほ場の排水性を良好に保つ。 □予防散布を徹底する。 □降雨中に収穫した果実は乾いてから箱詰めする。
	うどんこ病	平年並	平年並	○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □予防散布に努める。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。
	ハダニ類	—	並 (例年比)	○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。 □葉裏に多く寄生するため、葉液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
	アザミウマ類	—	並 (例年比)	○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。
	オオタバコガ	—	平年並	○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並で、夏秋ナスほ場(甲府市、笛吹市)におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □幼虫は果実内部に食入し、農薬がかかりにくくなるため、作業の際にはほ場内をよく観察し、食害痕や虫糞を目安に幼虫の早期発見に努める。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いため、発生初期の防除を徹底する。
	ハスモンヨトウ	—	平年並	○7月下旬現在、夏秋ナスほ場(甲府市、笛吹市)におけるフェロモントラップへの誘殺数は一部地域で平年よりやや多い。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □作業の際にはほ場内をよく観察し、卵塊やふ化後分散する前の若齢幼虫を見つけ次第捕殺する。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いので、若齢幼虫のうちに早期防除を徹底する。

※ハスモンヨトウ、オオタバコガのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
キャベツ・アブラナ科野菜	黒腐病	—	平年並	○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □台風、大雨の後に発生が多いため、防除を徹底する。 □アブラナ科野菜の連作を避ける。 □耐病性品種を用いる。 □予防散布を徹底する。 □収穫後の残さは丁寧にかたづけ、焼却処分する。
	菌核病	—	平年並	○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □曇雨天が続くと発生が多いため、防除を徹底する。 □予防散布を徹底する。 □発病株は早期に除去する。
	コナガ	—	平年並	○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並で、キャベツほ場（鳴沢村）におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。
	アブラムシ類	平年並	平年並	○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。

※コナガのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜全般】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
うどんこ病 ※ キュウリナス	—	平年並	○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □早期発見に努め、発病した葉・花・果実は除去してほ場外に出し、処分する。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。
アブラムシ類	—	平年並	○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。

【野菜全般】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
アザミマ類	—	平年並	<p>○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□ほ場周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。</p>
ハダニ類	—	平年並	<p>○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p>
オオタバコガ	—	平年並	<p>○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並で、定点調査ほ場（甲府市、笛吹市）におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□幼虫は果実内部に食入し、農薬がかかりにくくなるため、作業の際にはほ場内をよく観察し、食害痕や虫糞を目安に幼虫の早期発見に努める。</p> <p>□老齢幼虫には薬剤の効果が低いため、発生初期の防除を徹底する。</p>
ハスモンヨトウ	—	平年並	<p>○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並で、定点調査ほ場（甲府市、笛吹市）におけるフェロモントラップへの誘殺数は、一部地域で平年よりやや多い。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□作業の際にはほ場内をよく観察し、卵塊やふ化後分散する前の若齢幼虫を見つけ次第捕殺する。</p> <p>□老齢幼虫には薬剤の効果が低いので、若齢幼虫のうちに早期防除を徹底する。</p>

※ハスモンヨトウ、オオタバコガのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【**稲**】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠 (○) 及び防除上注意すべき事項 (□)
いもち病 (葉いもち)	—	平年並	<p>○ 7月下旬現在、定点調査ほ場(中北・峡南・富士東部地域)における発生量は平年並である。</p> <p>○ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>○ 葉いもち発生予測モデル「BLASTAM」の感染好適日出現数は少ない。</p> <p>□ 冷水灌がい田、日照不足田、窒素過多田及び隣接ほ場に発生が認められた水田などでは予防散布を行う。</p> <p>□ コシヒカリなどの発病しやすい品種では、早期発見に努め、病斑を認めたら直ちに薬剤散布を行う。</p> <p>□ 「BLASTAM」の感染好適日出現から7～10日後にいもち病が発生するため、状況に応じて防除を行う。</p> <p>□ 令和4年度病害虫防除情報第5号「イネいもち病の発生状況と防除対策について」を参考に防除対策を行う。※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること</p> <p>https://www.pref.yamanashi.jp/documents/104/220722bou_jyosho_jyohou5gou.pdf</p>
いもち病 (穂いもち)	やや早い	平年並	<p>○ 7月下旬現在、定点調査ほ場(中北・峡南・富士東部地域)における葉いもちの発生量は平年並である。</p> <p>○ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□ 予防散布に努め、葉いもちの発生が認められる地域では、穂ばらみ期から穂揃期に薬剤散布を行う。</p> <p>□ コシヒカリなどの発病しやすい品種では、発生状況に注意し防除を徹底する。</p> <p>□ 令和4年度病害虫防除情報第5号「イネいもち病の発生状況と防除対策について」を参考に防除対策を行う。※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること</p> <p>https://www.pref.yamanashi.jp/documents/104/220722bou_jyosho_jyohou5gou.pdf</p>
もみ枯細菌病	平年並	平年並	<p>○ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>○ 本病は出穂開花期の高温多雨により発生が助長される。</p> <p>□ 前年、発生が多かったほ場や、育苗期に発生が見られたほ場では、穂ばらみ初期から乳熟期にかけて薬剤散布を行う。</p>
ツマカゴキ	—	平年並	<p>○ 7月下旬現在、定点調査ほ場(中北・峡南・富士東部地域)における発生量は平年並である。</p> <p>□ 成虫及び老齢幼虫が株当たり30頭程度寄生している場合は直ちに薬剤散布を行う。</p>
ウンカ類	—	平年並	<p>○ 7月下旬現在、定点調査ほ場(中北・峡南・富士東部地域)における発生量は平年並である。</p> <p>○ 気象予報データを用いたウンカ飛来予測によると、7月の飛来予測回数は、やや少ない。</p> <p>□ 今後の予察情報と発生状況に注意する。</p>

※水稻葉いもち発生予測モデル「BLASTAM」の結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/blastam.html>

水稻いもち病の定点調査結果

https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/sakumotu_kekka.html

【大豆】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
莢害虫類	平年並	平年並	○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □着莢期以降10～15日間隔で3回程度、莢に十分かかるよう薬剤散布を行う。
カメムシ類	平年並	平年並	○7月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □着莢期以降10～15日間隔で2、3回、莢に十分かかるよう薬剤散布を行う。

III 各病害虫対策

【立木果樹類のハダニ類の防除対策】

- (1) 高温乾燥が続く時は急激に発生が増えるので、発生初期の防除を徹底する。
- (2) 防除にあたっては、薬剤抵抗性の発達を防ぐため同一系統の殺ダニ剤の連用は避ける。

【秋野菜作付前の対策】

（ハクサイ：べと病、軟腐病）

地下水位が高い畑や排水不良畑で発生が多くなるため、高うね栽培など排水対策を行う。

（ダイコン、ハクサイ：キスジノミハムシ、ハイマダラノメイガ）

- (1) アブラナ科野菜の連作により発生密度が高くなるため、連作を避ける。
- (2) ほ場周辺の雑草が発生源となるため、除草を徹底する。
- (3) 播種時に薬剤の土壌処理を行い、発生初期の防除を徹底する。

【施設栽培作物作付前の対策】

（抑制トマト：根腐萎凋病、抑制キュウリ：つる割病、イチゴ：萎黄病、土壌線虫等）

- (1) 前年発生の見られた施設では作付けを避け、輪作を行う。
- (2) 抵抗性台木を使用する。
- (3) 土壌中に残存している病原菌や害虫を死滅させるため、土壌消毒（薬剤処理や還元消毒、太陽熱消毒等）を行う。

【トマト黄化葉巻病、トマト黄化病の原因ウイルスを媒介する

コナジラミ類の防除対策について】

- (1) トマト黄化葉巻病、トマト黄化病はコナジラミ類がウイルスを媒介して引き起こされる。タバココナジラミは両者の、オンシツコナジラミは後者のウイルスを媒介する。
- (2) 半促成栽培終了後、残渣は完全に枯らして、付着したコナジラミ類を死滅させてから片付けを行う。
- (3) 施設を10日以上密閉し、高温による蒸し込みを行い、コナジラミ類を死滅させ、次作に持ち込まないように徹底する。

詳細については令和4年度病害虫防除所情報第3号「施設栽培トマトの黄化葉巻病対策について（半促成栽培終了後の対策）」を参考にする。

<https://www.pref.yamanashi.jp/documents/104/220629bou.josyo.jyouhou3gou.pdf>

※農薬の登録状況については、最新のものを確認すること

【野菜 抑制栽培作付前の対策】

青枯病（トマト）、半身萎ちょう病（トマト）、つる割病（キュウリ）、土壌線虫等

- (1) 苗は抵抗性台木を用いる。また、ほ場は過湿を避けるため高畝にして排水対策を心がけるとともに、連作をさける。
- (2) 土壌中に残存している病原菌や害虫を死滅させるため、ほ場の土壌消毒を行う。

【サツマイモ基腐病の防除対策】

近年、九州地域のサツマイモ産地において発生が確認され、被害地域の拡大が見られている。発病すると地際部から茎が枯れ、いもが腐敗する症状を引き起こすことにより、大幅な減収を生じる。本県での発生は確認されていないが、被害の蔓延を防ぐため、栽培期間中はほ場観察を通じて本病の早期発見に努め、発病株はほ場外に持ち出して適切に処分する。

本病の防除に関する詳細な技術対策については、農研機構のHPに掲載されている、以下のマニュアルを参照とする。

「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和4年度版）」

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator04.pdf

IV その他

【農薬危害防止運動について】

6月から9月は「農薬危害防止運動」実施期間です。農薬を使用するときは次の事項に注意して下さい。

- (1) 毒物又は劇物に該当する農薬だけでなく、すべての農薬について、安全な場所に施錠して保管するなど、保管管理には十分注意する。
- (2) 農薬の調製又は散布を行うときは、ゴム手袋、マスク等の防護装備を着用し、取扱を慎重に行う。
- (3) 公共施設や住宅地等に隣接する農地においては、農薬による健康被害が生じないよう風向きやノズルの向き等に十分注意し、農薬の飛散防止に努める。

(参考) 住宅地等における農薬使用について

農林水産省ホームページ https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/jutakuti/

- (4) 水田において農薬を使用するときは、止水に関する注意事項を遵守し、河川の汚染の防止等、環境の保全に努める。
- (5) 農薬の廃液や散布器具を洗浄した水が、河川や水路等に流れ出さないようにする。
- (6) 農薬やその希釈液、残渣等を飲食品の空容器等へ移替えしない。
- (7) 農薬の空容器、空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託するなど、適切に行う。
 - ・農薬使用者自身で、許可を受けた廃棄物処理業者に処理を委託する。
 - ・JA等、地域共同で適正に回収処分する体制が確立しているところでは、当該システムにより処分する。

連絡先

山梨県病害虫防除所（山梨県総合農業技術センター調査部）

TEL 0551-28-2941

Eメール byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

インターネット

山梨県病害虫防除所ホームページ

予報対象作物を中心に「トラップ調査結果」「病害虫写真」等を掲載しています。

アドレス <https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/index.html>